



(奈良)

この調査は一九九二年に実施された東大寺境内防災工事事前第三次調査(本誌第一六号)によって検出された石溝の範囲確認のために実施された。調査地は中門から西へ延びる廻廊の南側であり、防災第三次調査で検出されたT字状の石溝の南側の延長部分約五〇㎡を調査した。二度の調査で確認された石溝

奈良・東大寺

- 1 所在地 奈良市雑司町
- 2 調査期間 東大寺旧境内第七次調査 一九九三年(平5) 七月～八月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 西藤清秀
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 八世紀半ば
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

は北から南へ延びる検出全長約一一m、幅約四〇cmのもので、溝の中央北寄りで東側に東西方向の石溝がとりついている。南北溝はさらに南の調査区外へと延びていることが確認された。調査地の層序は、大きく六層に区分でき、最下層は鋳造関連の遺物を含む層で、大仏鋳造に使用された土砂を用いて整地したと考えられる層である。石溝はこの層を基盤として敷設されている。この上の層は石溝の埋土であり鋳造関連遺物を含む。さらにその上には多量の木屑を含んだ層が存在し、伽藍建立に関連するものと考えられる。今回の木簡はこの木屑層から出土した。この木屑層の上には奈良時代・中世・近世の三時期からなる整地された土が厚く堆積する。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 賛支国 (155)×(92)×(11) 0.81
- (2) 賛支 (30)×(37)×(3) 0.81
- (3) 賛 [支カ] (142)×(37)×(10) 0.81

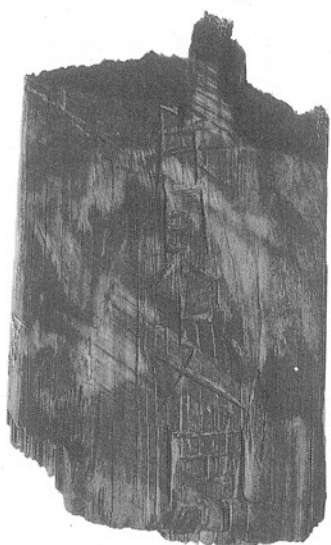
(1)～(3)のいずれも刻字木片であり、大きな木材から割き取ったものとみられる。材質はヒノキである。内容的には東大寺防災第三次調査で出土した刻字木片とかわりなく、いずれも讃岐国の国名を刻んだものである。なお「賛支国」の表記と似た例に、所謂「讃岐国

戸籍」(年未詳、『大日本古文書(編年文書)第一卷三七頁』と正倉院
宝物の醉胡従面袋白絶裏に捺された「賛岐国印」(松嶋順正『正倉院
宝物銘文集成』図録、一四六頁。吉川弘文館、一九七八年)などがある。

9 関係文献

平松良雄・和田 萃「奈良・東大寺」〔木簡研究〕一六、一九九四
年)

(1 7 9 西藤清秀
8 和田 萃・鶴見泰寿)



(1)



(3)

奈良・奈良女子大学構内遺跡

- 1 所在地 奈良市北小路町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)七月～一〇月、二一九
九三年(平5)七月～九月
- 3 発掘機関 奈良女子大学
- 4 調査担当者 坪之内徹
- 5 遺跡の種類 都城跡・中近世都市
- 6 遺跡の年代 八世紀～一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
一 一九八七年度調査



(奈良)

調査地点は大学構内から
現やすらぎの道(平城京左
京二条六坊五坪と十二坪の坪
境小路に相当)をへだてた
西側である。奈良時代は平
城京左京二条六坊五坪の東
寄りほぼ中央にあたる。一
二世紀末の瓦葺き建物から
なる寺院跡(焼失倒壊)、一